

廉価タイプや効率追求形製品ラインアップ併用でLED照明普及 オプティレッドライティング 清水謙一顧問

LED照明の発光効率の高まりなど性能向上・技術開発が進む中、オプティレッドライティングは、発光効率をより高めたLED照明製品だけでなく、初期導入費を抑えることに重きを置いた廉価タイプのLED照明もあわせてラインアップしている。同社の清水謙一顧問にLED照明製品開発の考え方などについて話を聞いた。

——業界の動向などをどう見ている

日本照明工業会が、LED照明や有機EL照明などの半導体照明(S S L)に関する2020年までの戦略を策定している。2020年までに出荷されるフロー分の照明を100%、また実際に設置されているストック分についても50%をS S L化することを目指しているが、新たな市場開拓、拡大等が必須である。日本照明工業会が公表している「照明器具自主統計2015年度」によると、2015年のS S Lフロー率は86.2%、ストックに関しては明確なデータはないものの、10~20%程度であろうと言われている。性能については各メーカーのレベルが高まりひと段落した状況にあるが、一方で価格競争は続いている。またLED照明の「量から質へ」という考え方も求められるようになり、調光・調色対応や高演色性などの付加価値を高めた製品の開発や植物育成用などの新用途開発も進められている。

——LED照明の実際の普及状況は

大手のスーパーなどではすでに照明のLED化が進み、今後ボリュームゾーンとなるのは中小ビルなどの照明のLED化だが、進展が遅いのが現状。LED照明製品の価格が課題となっているほか、テナントであればオーナーの了解も求められる。また弊社では高天井タイプのLED照明も製造・販売している。オフィスの蛍光灯に比べると全体のボリュームは小さいが急速に伸びて

おり、工場、倉庫や体育館などのスポーツ照明やライトアップ用などでの活用が進められている。

——貴社の最近の製品開発は

初期投資を抑え照明のLED化が図れ

る直管形LEDランプ「P Zシリーズ」を新たに製品化した。LED素子の使用数削減や電源部の設計変更などで弊社の標準型のLED直管ランプ製品と比べて価格を約3割低減している。また楕円形断面形状によりLED素子を目立たなくした均一な光も実現している。こうした廉価タイプだけでなく、より高効率のタイプもあわせて製品化している。初期投資を抑えてLED化を図りたいというニーズの一方で、高効率タイプのほうが長期的に見た場合は経済的になるということがある。次々と新しいLED照明製品のモデルが登場すると、物理的な寿命が終わる前に取り換えたほうが経済的なメリットが得られ、長寿命だから1度LED化すればずっと変えないというものではなくなってきている。また直管形(蛍光灯)タイプは、今後一体型のベースライトの比率が高くなっていくと想定している。中小の案件を中心に蛍光灯の既存器具をそのまま活用するレトロフィットへの需要もあるが、器具が古ければ器具ごと交換する必要がある。ベースライトタイプは材料、器具の部分が少なくコストが抑えられるといったメリットがあり、ベースライトの製品開発にも力を入れていく必要がある。



清水謙一氏